

【議事概要】令和7年度第3回札幌市せき柱側わん症検診検討会

名 称：令和7年度第3回札幌市せき柱側わん症検診検討会

日 時：2025年9月10日（水）午後6時30分開会

会 場：STV北2条ビル 3階 会議室C

出席者：全委員11名のうち、10名が出席（1名欠席、1名遅参）

その他：会議は非公開で進行され、会議資料および議事録等も非公開として取り扱う。

1 前回検討会の振り返り

せき柱側わん症検査の精度向上のための以下の4項目と、前回の検討会で出されたメリット・デメリットおよび委員の意見を説明

(1) 前屈検査の徹底と検査手法の標準化（①）

- ・内容：全員対象の小学校4年生から高校1年生の前屈検査を徹底し、標準的な検査手法の検討と、学校医向けマニュアル・映像素材の充実を図る。
- ・メリット：発見率と検診能力の向上が期待できる。
- ・デメリット：負担感の増加、議論の難しさ。
- ・意見：短期的に取り組める。子どもも事前に動画などで練習が必要

(2) 機器検査の実施及び前屈検査の在り方の整理（②）

- ・内容：学校・学校医双方の負担軽減となる機器の選択、持続可能な機器検査の手法、機器検査対象者への前屈検査の要否を検討
- ・メリット：制度の統一・向上、機械によっては検査結果の電子化が容易
- ・デメリット：測定委託による費用増大、選択できる機械が少ない
- ・意見：体験会で手軽にできたため前向きに検討も可能だが、機器が発展途上で時期尚早な面もある。スクリーニングの目標設定が必要

(3) 学校医と専門医の連携の強化（③）

- ・内容：疑い例の精密検査受診勧奨の徹底、学校医と整形外科医が情報交換できる枠組みの創出
- ・メリット：能力の底上げ、整形外科医の学校健診状況への理解増進
- ・デメリット：偽陽性の増加、偽陽性率の高さによる検診意義への疑問
- ・意見：短期的に取り組める。スクリーニング現場では偽陽性を恐れず専門医につなぐことが大切

(4) 家庭におけるチェック機能の向上（④）

- ・内容：せき柱側わん症や運動器検診の位置づけの理解促進、分かりやすい問診票や保健だよりの検討

- ・メリット : 家庭での健康意識と精密検査の受診率向上
- ・デメリット : 家庭環境や地域特性によるチェック機能の格差
- ・意見 : 重要だが、自己責任の面もあり工夫が必要

2 論点整理

論点整理のため、事務局から以下について説明

(1) 学校健診の位置づけとプロセス

① 位置づけ

学校生活を送る上での支障の有無をスクリーニングし、健康状態を把握し、健康教育に役立てることを目的とする。

② プロセス

- i 家庭・児童生徒への意義・方法の周知 → 運動器検診問診票による保健調査（家庭チェック）
 - ii 学校・学校医による内科検診（問診、視触診、前屈検査）→ 異常の有無をキャッチ（ここまでが学校でのスクリーニング）
 - iii 異常例は地域の整形外科を受診（精検）→ 専門医療機関の受診判断
 - iv 専門医療機関で画像検査等 → 治療方針の決定（装具、手術、経過観察等）
- ➡せき柱側わん症検査は、異常を発見し、早期に専門医の受診につなぐというスクリーニングの役割が最も重要であり、その役割を踏まえた資源（人、予算）の投入が必要

(2) 札幌市の現状と課題

- ・被患率：国想定疾病としての被患率2.5%程度と比較し、最もボリュームゾーンの中学生でもその割合より低い（令和6年度の中学校は2%強）
- ・精検受検率：中学生では、異常ありの通知に対し学校へ結果が戻る割合は半分程度と伸び悩んでいる。
- ・学校医の負担：学校医の3分の1が小児科、3分の2が内科であり、整形外科領域の診断や前屈検査に時間を要することから心理的負担が大きい。
- ・検診方法：9割以上が着衣での検診を実施しており、脱衣に戻すことは困難

3 重点項目と活動目標（案）

事務局より、これまでの議論を踏まえた4つの重点項目と活動目標（案）を提示

(1) 前屈検査の徹底と検査手法の標準化

- ・目標：国の想定被患率（2.5%程度）を目安とし、学校医が自身の検診の確かさを確認できる指標を提示する。
- ・取組：「札幌市版マニュアル」を策定し、令和9年度の内科検診から標準的な手法を導入することを目指す。

(2) 機器検査の実施及び前屈検査の在り方の整理

- ・目標：将来的な学校医の心理的負担軽減と、持続可能な検査手法の確立
- ・取組：令和8年度に向けて、現行の2機種を用いたパイロット実証（短期リースやデモ機の活用）を実施し、手法を検討する。

※ 留意点：機器は発展途上の面もあるため、全校導入は慎重に判断し、まずは有効な活用法を確立させる。

(3) 学校医と専門医の連携強化

- ・目標：精密検査（2次検査）への受診率向上
- ・取組：
 - ◇学校から学校医への検診結果のフィードバック体制の構築
 - ◇学校医と専門医の意見交換会や研修会の開催
 - ◇「協力医療機関リスト」を作成し、受診先を選びやすくする仕組みの導入

(4) 家庭におけるチェック機能の向上

- ・目標：家庭での健康意識向上と、精密検査の受診徹底
- ・取組：
 - ◇問診票の改良（検診の意義やリスクの明示）
 - ◇啓発動画や電子配信ツール（すぐーる等）を活用した情報提供

4 グループ討議の結果（A・Bグループ）

2つの班に分かれ、事務局案の具体化についてグループ討議を実施
（討議概要は別紙のとおり）

5 その他

次回の検討会も非公開とすることが承認された。

グループ討議概要

1 活動目標（数値目標）の設定

- (1) 発見率（スクリーニング目標）
 - ・疾病としての罹患率（約2.5%）を踏まえ、学校現場では3%～5%程度を拾い上げることを目標とする。
 - ・目標値を具体的に示すことで、学校医が自身の検診結果を振り返る目安（フィードバック）とする。
- (2) 精密検査（精検）受診率
 - ・現在、精検対象者の約半数に留まっている受診率を、7割～8割程度まで引き上げることを目指す。

2 前屈検査の標準化と機器導入

- (1) 検査手法の改善
 - ・着衣検診が主流である現状を考慮し、無理な脱衣は求めず、視診で肩甲骨や背中
のラインを正確に確認する手法を共有する。
 - ・標準的なやり方を示す動画を作成し、児童生徒への事前指導や学校医の研修に活
用する。
- (2) 機器検査のパイロットスタディ（実証実験）
 - ・令和8年度、小学校5年生と中学校1年生を対象に、小規模校での実施を検討
 - ・検出率の比較のみならず、学校医の負担軽減や「検診への自信向上」に繋がるか
を検証することを目的とする。

3 専門医との連携および家庭への啓発

- (1) 「協力医療機関リスト」の作成
 - ・側わん症の診療が可能な整形外科医のリストを医師会と協力して作成し、保護者
に提供することで受診の心理的ハードルを下げる。
- (2) 学校医へのフィードバック体制
 - ・健診結果や精検受診状況を学校医にフィードバックし、自身の活動結果を把握で
きる仕組みを構築する。
- (3) 家庭への情報提供強化
 - ・電子配信ツール（すぐる等）やQRコードを活用し、側わん症のリスクや検診の
意義を伝える啓発動画を保護者へ届ける。
 - ・未受診家庭に対しては、養護教諭らによる丁寧な再勧奨や、学校医名を併記した
通知による重要性の伝達を検討する。

4 課題と今後の方向性

(1) システム化の必要性

- ・側わん症に限らず、学校健診における未受診者への個別フォロー体制の確立が課題として認識された。

(2) 継続的な議論

- ・スクリーニング精度の向上を優先しつつ、その結果を元に受診率向上のための議論を継続する。